

## 平成25年度京都市伝統産業活性化推進審議会

日時：平成25年11月12日（火） 15：00～17：00

場所：京都ロイヤルホテル&スパ 2階 翠峰の間

出席者：14名（五十音順，敬省略）

大谷 貴美子	京都府立大学生命環境科学研究科教授
柿野 欽吾	学校法人京都産業大学理事長
島田 昭彦	株式会社クリップ代表取締役社長
白須 正	京都市産業観光局長
高木 壽一	元京都市副市長
滝口 洋子	京都市立芸術大学美術学部教授
塚本 稔	京都市副市長
日野 明子	スタジオ木瓜代表
三木 清	京都伝統工芸協議会会長
三原 陽市郎	京の伝統産業春秋会会長
森本 知佳	市民委員
山舗 恵子	株式会社京都リビング新聞社編集部編集長
山本 建太郎	京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授
若林 靖永	京都大学大学院経営管理研究部教授

欠席者：4名（五十音順，敬称略）

河村 和子	京の伝統産業春秋会監事
林 早苗	京都市小学校長会副会長，京都市立仁和小学校校長
船戸 潤子	市民委員
渡邊 隆夫	西陣織工業組合理事長

### 1 開会

### 2 塚本副市長挨拶

### 3 議事

議案 「京都市の伝統産業」の追加について（案）

報告事項 第2期京都市伝統産業活性化推進計画に係る平成25年度新規事業等について

#### 4 議案審議

(京七宝の作品を鑑賞，その後質疑)

<委員>

- ・ 事務的な文言のことであるが，有線七宝や無線七宝，象嵌七宝以外にも鑄造七宝や省胎七宝などがあるとのことだが，その文言を加える必要はないのか。

<委員>

- ・ 資料には，あくまでも京七宝の中で代表的なものが表記されており，すべてを網羅する必要もないと考えるが，その辺の表記については，今後，事務局と申請者とで調整する。

<委員>

- ・ 象嵌七宝や京象嵌など，同じ表現の部分があるが，それは問題ないのか。

<委員>

- ・ 今回の認定業種はあくまでも京七宝であり，象嵌七宝はその中の1つの技法による名称と考えられるため，問題はない。

<委員>

- ・ 伝統産業というからには，一定規模の産地要件が必要ではないのか。

<委員>

- ・ 国の指定要件にはそのような規定があるが，皆様もご存知のとおり，京都市の指定業種の中には小規模産地の業種もあり，問題はない。

(京七宝を京都市の伝統産業として追加することに対して，全委員賛成により可決)

#### 5 報告事項説明後に意見交換

<委員>

- ・ 「おもてなし」という言葉でも話題になった東京オリンピック開催決定であるが，是非，京都市も今回の決定を受けて，伝統産業あるいは伝統文化でいかに「おもてなし」をするのか検討してもらいたい。

<委員>

- ・ 産業観光局として，来年度をかけて新たな観光振興計画を策定する予定であったが，今回の東京オリンピック開催決定を受けて，それを前倒しで今年度から策定の準備を開始する予定である。そうすることで，より迅速に準備のための予算を確保して，開催に向けてオール京都の体制で取り組めるものと考えている。

<委員>

- ・ 資料にアンケートハガキの結果が掲載されており，伝統産業ふれあい館の記述で，「もっと触れられるモノを増やすべき。見学だけでは物足りない」とある。私もあそこに行くと，修学旅行生がお土産で買うようなものしか売っておらず残念である。もっと金銭的にゆとりのある人が購入できるような魅力的な品揃えにしてみてもどうか。

また、今回の京七宝のような素晴らしい作品も含めて、見る方と買う方との連動性を図り、積極的に購入できるような仕組みづくりをお願いしたい。

<委員>

- ・ ふれあい館の常設ショップで、様々な伝統産業製品を買えるようにはなっているが、見学される方との遊離性を少し感じる。せっかくいいモノがあるので工夫していきたい。

<事務局>

- ・ ふれあい館については、あり方そのものを見直す時期にきているので、今のご意見も含めて様々な角度から検証していきたい。

<委員>

- ・ 先日、本校への留学生をふれあい館に連れていったが、大感激していた。デザイン系の留学生なので、感銘を受けたモノなどをすぐに自分の作品に応用して使う。外国の方々は敷居の高さを感じないので、大胆なことができる。日本人は「伝統」という文字で少し及び腰になり、新しい発想が生まれにくい。ここが問題で、大学のまち京都でもあるので、各大学が連携してもっと大胆な取組ができるような仕組みづくりが大事ではないか。

<委員>

- ・ 首都圏や海外も含めて様々な販路開拓事業が行われているが、その結果を検証することが大事ではないか。成果の出ないものは大胆に止めることも必要であり、足りないものを検証することで新たな事業の土台となる。同じことのくり返しではもったいないので、その辺りを是非お願いしたい。

<委員>

- ・ ここ数年感じているのが、例えば海外に行くと、その国の人々がどのようなものを求めているのかを作り手が知ることが大事である。今日持って行って、すぐに売れるようなものではない。いかに求められているものを理解し、そこに自分の技術をマッチングさせるかで売れるものと自分の思い込みで作っているものとの差が生まれる。

<委員>

- ・ 私はアドバイザー的なものを地方でしているので、観光産業ではやはりお土産の重要性は一定理解できる。しかし、そればかりではその土地の本当の個性が損なわれる。やはり、その土地のほんもの、京都で言えば「京もの」があちらこちらで買えることが、様々なニーズに応えることになる。どうも、みやこめっせやふれあい館が観光客向けの施設になっているように感じる。とても破天荒なことを言えば、京都市役所などはすごい趣があって、そこに「京もの」のセレクトショップなどがあれば、すごくいいのではないか。

<委員>

- ・ みやこめっせで毎年展示会を開催しているがやはりお客さんはなかなか地下には降りて来ない。1階ではたくさんの人で賑わっていることがあり、すごくもったいない。動線を工夫する必要があるのではないか。

<委員>

- ・ 「わたしたちの伝統産業」という事業では、小学校4年生向けの副読本として教材を作っておられる。子どもの頃から伝統産業についての理解を深めて、そこから産業の発展が生まれる。教育ではないが、慣れ親しむ程度でもいいので、子どもたちに向けたよりよいものにしていただきたい。

<委員>

- ・ 「伝統産業の日」事業やふれあい館についても、知られていないことが非常にもったいない。今まで知らなかった人に足を運んでもらうには、やはり効果的なPRが重要であり、フェイスブックやツイッターなどの効果は非常に大きい。特に、ターゲット層に対して非常に影響力のある方に協力をお願いすることは今後必要になってくるのではないかな。

<委員>

- ・ 行政がいくらがんばっても、やはり限界はある。それに対してあれをしろこれをしろと言っても難しい。やはり、この業界でうまく仕事をしている人とタッグを組んでやる方が成功例としては早いのではないかな。

<事務局>

- ・ 私たちの伝統産業では、幼少期からの教育の重要性を鑑みて各学校の先生方にご協力をお願いしている。学校だけで全部を教えきれものではないが、現場ではその他にも教えることがたくさんある中で貴重な時間を割いて伝統産業への理解を深めてもらっている。先生方には好評というお声も聞いているので、うまく調整しながら多くの子どもたちに伝えていきたい。
- ・ ツイッターやフェイスブックの話だが、PRの重要性は認識しており、現在もそのようなSNSは活用しているが、今後は、委員ご指摘のとおり影響力や情報の拡散力をもった方にアプローチをしていきたいので、そういう方をぜひ御紹介いただきたい。
- ・ 成功している方との協力については、こちらもそのような認識は持っており、海外事業ではそのような方にプロデューサーとして参画していただき、そのネットワークを通じてうまく事業を展開している。今後もそういった視点で取り組んでいきたい。

<委員>

- ・ みやこめっせでは地上から地下に降りる導線がうまくいっていない。入って全体が見渡せるレイアウトが理想である。また、今のお客さんは見るだけでは満足していない。もっと参加できる、体験してもらえる機会を増やすことが大切である。

<委員>

- ・ 祇園祭りの大船鉾が来年復活するということであるが、本学の学生が見るだけでなく、浴衣をデザインするなどのかたちで参加するようになっている。若者の和装への憧れは強く、きものを着る機会を増やすことや、若者に参加してもらえるような切り口の事業は大切である。

## 6 閉会